

EBMだけではダメ! 患者中心のアプローチNBMとは

離床推進ファシリテーター OTグループ
新名 大介



徳島赤十字病院

【生存することがゴールではない】

皆さんは離床に対してどう考えていますか？作業療法士と聞いて何を思いますか？突然の病気やケガによって運び込まれてくる救急患者。初期治療が終われば再び社会で生きていかなければいけない。しかし、そのやり方がわからない、出来ない人たちが病院という場所にはいます。昨日までできたのに、1週間前まで出来ていたのに、障害という個性は重く、圧しかかります。

この学会誌を読まれている方たちはよくわかると思います。高齢化と救急医療の進歩によって重症の生存者が増えていることを。そのような生存者に対しての医学的加療、社会復帰の難しさを。

【OT が大事にする NBM とは】

そんな人たちに私たち作業療法士が治療するにあたって大事にしている事があります。それは「語りを聴くこと」です。

全ての訴えには“あの日を取り戻すための重要なピースが隠されている”と私たちは考えているからです。このような介入手法の事を医療の世界ではNBM(Narrative Based Medicine: 物語と対話による医療)といいます。NBMにはEBM(根拠に基づく医療)を補完する役目があります。EBMは当然の如く“病気”を治すことに関しては効率的で有効的な考え方ですが、全ての患者には当てはまりません。NBMは医療を考え直す新たな考えとして、専門性に偏らず、また患者だけでなく、その家族も含めて、患者の全体と実際に関わる中で誕生しました。この視点は“科学としての医学”と“人間の触れ合いという意味での医療”とのギャップを埋めていく効果を持ちます。医学の限界が、患者の人生の限界ではありません。後遺症を残しながら生きて行くことを迫られる時も大いにあります。その中で、障害を個性としてとらえ、自分自身の人生の価値観をどこに置き、どうやって生き、どう選択するか、その人がその人らしく、再び生きて行くために、“今”何をすればいいのかをNBMによる医療では考えさせられます。

【OT 専門部会が目指す離床】

「その人の一番の良き理解者であること」が、私たち作業療法士が普段追い求めている事です。その理解と治療のもとになるのがNBMです。不安に満ち溢れた患者に寄り添い、語りを聴き、共に再び一歩を踏み出す。

私たち作業療法士はそうやって離床に対して思いををせ、今日までやってきました。

今ここに有志が集い、OT 専門部会が発足しました。

「ことはじめ」

これからのOT 専門部会の活動を楽しみにして下さい。

また、皆さんの施設で離床困難事例がありましたら作業療法士に一声を。

きっとおもしろいアイデアを提供してくれますよ。

離床推進ファシリテーター OT グループでは、共にOTの離床を盛り上げてくれるメンバーを募集しております。参加希望の方は、日本離床学会事務局にEメール(jsea@rishou.org)にて、件名：一般市民ファシリテーター参加希望、本文に①氏名②所属先③職種を記載してお送りください。